



男は 痛い !

國友万裕

第16回

ペコロスの
母に会いに行く

1. 死

ラグビーの上田昭夫さんが死んだ。62歳だったとのことで、まだまだ若い死だった。俺はこの人が好きだった。ラグビーだけど、甘いマスクで、ソフトな物腰で、俺が一番憧れるタイプだ。俺の理想は、ソフト・マッチョなのだ。

今年は1つ違いの従兄がなくなり、母の従姉も80過ぎでなくなった。俺が不登校だった時代に大げんかした神経科の先生もついに亡くなったとのことだった。おそらく80代前半だろう。先日、ある機会に、大学院時代に同期だった人で、名古屋の大学に就職した女性が、もうとっくにこの世の人ではなくなっていることも知った。名古屋に移って、3年後くらい後に病気で亡くなったのだそうだ。まだ30代だったはずだ。

50代となって、着々と死が身近になってくるのを感じる。母からは、がん保険にはいつおきなさいとうるさく言われているところだ。俺の年で保険に入るとなれば、相当高額のはずだが、「いまは、がんは誰でもなるし、治る病気になっているから」と母は言っている。

人間だったら、一度は必ず死ななきゃいけない。俺の人生にはいつそれがやってくるのか。どこで、どういう形で、俺はこの世と別れを告げるのだろうか。俺は、若い頃は長生きしたいと思っていた。平均寿命より早く死ぬ人は、不幸な人だと思っていた。しかし、今は人生長さだけじゃないことはわかっている。俺のおばあちゃんは90くらいまで行きたが、15年くらい狭い病院に入院して、死んで

いった。つらかったろうなあ。俺は何才まで生きるのか？ 妻子がいないから、晩年は孤独だろなあ。死の瞬間にどういう気持ちだよぎるのだろうか。

2. 時は流れて

2週間に一度、俺は烏丸の心療内科に通っている。その日、先生は、俺のほうにパソコンを向けた。「ほら、『全般性不安障害』と入力しようとしたら、『全般政府案障害』と出るんだよ。ちゃんと心療内科のソフトを入れているのに」と先生は笑っておっしゃった。

この先生のところに通い始めて、もう20年が経とうとしている。ここ以外はどこにも行かなかったわけではない。他の心療内科にも通った時期はあった。30代の頃までは、まだ心は嵐だったので、ありとあらゆるところに通った。40過ぎて、だいぶ精神状態が安定してきたからは、もっぱらこの先生のところばかりになった。

初めてお会いした頃40代くらいだったこの先生は、もう70近くになっているはずだが、今でも、おしゃれで、センスのいい先生だ。初対面の時は、鋭くて怖い人かと思った。その後も、あまり親密に患者と話をする先生ではなかった。心療内科だとある程度は距離をおいて患者と接しておかないと、相手のペースに巻き込まれたら、大変なことになる。そのことを計算してのことなのだろう。その先生が、俺に対して、自分のパソコンを向けるなんて、一歩親密さを許してくれたと思ったものだった。20年も通ってくれている患者だから、心を許しても大丈夫と思ってくれているのだろう。嬉しかった。

烏丸には、京都シネマという映画館がある。この映画館の壁にはホワイトボードがあって、そこにプレミアム会員の名前が列記されている。俺の名前もものせられている。俺は、この映画館の前身の朝日シネマだった頃からこの映画館の常連で、最初からの会員であるため、常時900円で映画を見ることができる。

思えば、河原町にはめっきり行かなくなった。俺が京都に出てきた頃は、京都のスポットといえば河原町しかなかった。しかし、今となっては、当時の映画館はすべて撤退し、梶井基次郎の『檸檬』に出てくる本屋さん丸善もなくなり、新京極のシネコンMOVIX京都でたまに映画を見る以外には河原町界限に行くことはほとんどなくなった。

昔は大宮にもいくつか映画館があったが、それもなくなり、今は映画を見るときは、圧倒的に二条のシネコンである。ちなみに俺はこの近所に住んでいる。ミニシアター系のものは京都シネマ、マニアック系は九条のみなみ会館、たまにMOVIX京都や八条口のTジョイ京都にでかける。京都は街が狭いので、いずれも自転車で行ける。きわめて便利だ。

15年くらい前までは、大阪の映画館にも足繁く通っていた。あの当時は、東大阪の大学で教えていたせいで、梅田に行くことが多かった。仕事帰りだけでなく、土日に大阪の映画館まで出るのも苦にならなかった。あの当時は天満の男性グループに出入りしていたので、大阪の男女共同参画センターであるドーンセンターにもよく行ったものだった。あそこの図書館はジェンダー関連の本がたっぷり、一時期は貪るように借りて読んでいた。しかし、男性グループとのトラブルが起きてから、天満はトラウマの地となり、その当時、

あれこれ考えることあって、東大阪の大学の仕事もやめてしまった。収入は月に10万円くらい減った。つらかった。

しかし、藁をもつかむ思いで、関西カウンセリングセンターに通い、そこで出会った男のカウンセラーの先生に、俺はついに例の上半身裸にさせられたトラウマを語った。家族以外の人にそのことを語ったのは、あの時が初めてだった。事件が起きて、15年近くも経過していた。あの先生とはもう12年以上会っていない。当時、60代後半くらいだったから、もうなくなっているかもしれない。あの時、仕事が暇でなかったら、あの先生との出会いもなかった。今思い返せば、何一つ無駄はなかったのだ。

考えてみると、俺は梅田には相当の回数来ている。30代前半の頃は大阪での仕事がメインだったし、俺は大学院の博士課程は西宮だ。梅田を経由して通っていた。当時は恐れ多くてほとんど話もできなかった指導教授の先生とは、3年前に出版社の人の好意で再会した。20年の月日を経て初めて対等に先生と話げできた。握手も交わした。当時は何のために西宮の大学の大学院なんかに通っているのかと、悶々としていたが、これも無駄じゃなかったのだと思った。

今は、京都での仕事がメインになり、大阪には週に1コマ寝屋川の大学に行くだけのことだ。寝屋川は、大阪とは言っても東大阪のような大阪カルチャーではないので、ほとんど京都と気分は変わらない。仕事以外の行動範囲は烏丸から大宮、西院、そして二条界限がメインである。京都の人はわかるだろうが、阪急沿線なのだ。3年前まではずっと阪急電車がメインの交通手段だった。

ところが3年前にほんの数軒先のマンションに引っ越した。すると阪急の駅よりもJRのほうが微妙に近くなり、阪急に乗る機会はめっきり減ってしまったのだった。俺は今の通りにもう26年も住んでいる。最初のマンションは4年半。ワンルームの学生マンションだった。次はその数軒南の2Kのマンション。ここでは18年ほども過ごした。そしてそこから最初のワンルームを通り越して、数軒北の新しいマンションへと移った。思えば、俺は同じ風景を四半世紀以上も見続けているのだ。

全然違ったところに引っ越そうかと思ったこともあった。6年ほど前になるだろうか。家賃の安い山科に移ろうかと思った。当時、俺は山科の自助グループにかかわっていた。しかし、移らなくて幸いだった。その山科のグループのおじさんとも大げんかとなり、山科は天満に続くトラウマの地となった。しかし、このことがきっかけで、N先生とは親しくなり、対人援助学会にも入れてもらった。これも無駄ではなかったのだろう。立命館とも復縁である。大学時代、陰口をいわれまくった俺にとっては、立命館もトラウマの地なので、もう復縁はないかと思っていたのだが、これが実れば立命館での4年間にも新たな意味づけができるかもしれないのだ。

「この頃、少し人生上向きになってきたんだから、長生きしなきゃ」と電話の向こう側から母の声。母は、俺にとっての最大のトラウマの地である九州にいる。母は帰って来いとは言わない。俺も帰るつもりはない。しかし、死んだら、故郷の墓に入るしかないという心配がよぎる。新たに墓を買うようなお金はない。それに、親や兄弟には感謝しているので、一緒に墓に入らないのは、家族不幸だ。だけ

ど、九州で眠るのは……。若い頃は、墓のことなんて考えなかった。姑と一緒に墓は嫌だと言っている人たちの気がしれなかった。しかし、50になると、墓のことも真剣に考えるようになっていくのだった。

俺は大学で非常勤講師を始めて、23年目である。最初の頃から控室で顔を見ていた先生たちも、少しずつ定年でやめていく。知り合った当初は40代だった先生たちが、もう60代後半なのだ。学生たちと話をしても、もうご両親が俺よりも若い。考えてみると、俺が大学で教え始めた頃、彼らはまだ生まれていなかったのだった。時の流れ、切ないなあ。

俺の人生は、どこで終わりを告げるのか。これまでのトラウマの地とすべて和解して、わだかまりなく死んでいくのが理想なのだろう。しかし、痛恨の思いを抱えたまま死んでいくのも、それはそれで人生。神様に任せるしかないのだ。

俺は、様々なトラウマの地を経由しながら、今住んでいる界隈にだけは長年根強く踏みとどまっている。俺は長く嘔み続けて、味のなくなったチューインガムのように、毎日、同じ風景を眺め、同じことに囚われてきている。この囚われが、俺の人生の宿命なのだ。

3. 男性性の目覚め

この頃、スポーツクラブで、マッスル系のスタジオプログラムに入っている。バーベルや重りを用いて、音楽に合わせてながら、筋肉を動かしていくトレーニングだ。おかげで、一時期に比べるとムキムキになった。肩の筋肉が盛り上がってきて、腹筋も硬くなってきた。

プログラムに参加する人は、男女半々である。女性の方がやや多いかもしれない。俺はこのプログラムを受けながら、もし男ばかりだったらということを考える。例えば、高校や大学の体育系のクラブに入っていたら、男ばかりで筋トレということになっていただろう。普通の男子たちは、それをする中で男のアイデンティティを築いていくのだ。しかし、俺にはそれができなかった。運動神経が鈍いからということが大きな理由だが、男性ジェンダーへの反発も大きな理由だった。

先に挙げたカウンセラーの先生は、俺がすべてを語った時、「ジェンダーに囚われたとなったら、大変な苦勞でしたね」と言ってくれた。子供の頃から女の腐ったような子と言われ続けた俺は、自分が男だということに自信がなかった、男っぽいことをするのがことごとく恥ずかしかった。他の男の子たちに同一化できなかった。その俺が、冬場に上半身裸にさせられる。それも毎回体育の授業ごとになのだから、悪夢だった。この先生の教育は、どう考えても行き過ぎであった。

俺は、裸を強制されたことで、心が壊れた。俺は、自分は男ではないのではないかと思っていたので、大人になってからも、男になることに抵抗があって、自分の奥底から湧き上がってくる、自然な欲求を常に抑圧して生きてきたように思う。先生から、「男か女かわからなくなったのは、いつ頃からですか」と訊かれ、「小学校の高学年くらいです」と答えた。「だったら、大丈夫でしょう」と先生は言ってくれた。臨界期を超えた年だからということなのだろう。いつかは男としての意識を取り戻せるだろうという意味でおっしゃったことのようにだった。

俺は、少年時代に過酷な男性ジェンダーを強いられた。この点では俺は明らかに不運だった。俺は様々な男の人の話を聞いてきたが、俺くらいひどいジェンダーを強いられた経験のある人はそうはいない。俺の知り合いのある先生は、俺より5才年下で、山梨出身だが、「男は男らしくとは言われなかった」とおっしゃっていた。3年ほど前に教え子の男の子が、たまたま九州の出身で、俺と同じ小学校だとわかった時、「俺は、九州は嫌いなんだ。男は男らしくと言われるからね」と話した。すると、「あー、それはありますよね」と彼はうなずいてくれた。彼は、俺と同じ小学校を出た後、中学は俺と違ったところに通っている。「先生の通っていた中学は、柄が悪いから」と彼。確かに、例の裸教育を強いた教師は、俺の中学だからこそ、あそこまでの男根教育にでることができたのである。勉強はできないけれど、肉食系の荒っぽいタイプの子が多かったので、裸を強いたりするのはしやすかったのだろう。適度のジェンダーだったら、俺だって受け入れられた。しかし、あの先生のジェンダー教育は極端だった。しかも、周りに同一化できる男子がいない。恥ずかしさを共有したいと思う連中がいない。どうしても受け入れられないことを無理矢理に受け入れさせられた時、トラウマは生まれる。俺はあの時、心が破壊されたのである。

もう35年くらい前だが、五木寛之原作の『四季・奈津子』（東陽一監督・1980年）という映画があった。この映画のヒロインは、自分を変えるために、ヌードを撮ろうとする。烏丸せつ子と阿木耀子のヌードが話題になった。女性がメインの映画だが、原作も監督も男だから、どうも女性には反発が残ったらし

い。ある女性が、「この映画が描いているのは嘘の女だ。女は裸になることなんてたいしたことだとは思っていない。男が思っているだけだ」と映画雑誌に書いていたことを覚えている。これは俺の知り合いの映画の仕事をしている女性もしばしばおっしゃることだ。男にとっては70年代になって、女のヌードの時代になったことは画期的だったのだろうけど、「女は、人生を変えるほど特別なこととは思っていない」と彼女は言う。確かに彼女たちの言うことはあたっていて、その後になってくると、宮沢りえのヌード写真集など、自分を表現するために主体的にヌードになる人は増えていって、今では海外旅行でヌードツアーなどもあると聞いている。俺の知り合いの女性も、「若い時に撮っておけばよかったわ」ともらしていた。

ところが、男の場合だと、これとは逆の状況が起きる。男には羞恥心がないと思われているため、いやでも裸を強制される。俺は裸を強制されたことで、人生が大きく変わったわけだが、そのことを理解してくれる人がいるだろうか。この連載に何度も書いてきたとおり、男に羞恥心がないと思うのは間違いである。ある時、スポーツクラブであるおじさんからこう言われたことがある。「ムキムキになって、一度タンクトップを着てみたいんですよ」と俺がいうと、「タンクトップだと乳が透けてみえるじゃないの。恥ずかしいよ」とおじさん。男の人でこういう人は多いのである。アメリカでも、シャツレスフォヴィア（上半身裸になることの恐怖症）という人は一部に存在するようだ。男の人の場合、プールや海の場合は、裸になるのが規範だから仕方がないという思いがある。「しかし、他の場所で

裸になるのは、いくらなんでも恥ずかしい」というのが本音のはず。男の本質と男らしさは別物。好きで裸になると強制されるのでは別物なのである。マッチョな人でも恥ずかしいと思うことを無理やり強制されて、心を壊された俺は、自分の男の部分を拒否するようになっていった。俺にとっては、プールで海水パンツになって泳ぐくらいが、女性と違ったことをする部分だった。だから、俺は自分が男なのか女なのかもわからなかった。

ジェンダーを受け入れられなかった俺は、確かに不幸だった。上田昭夫さんのような体育系の男の人が、爽やかで、好ましく感じられるのは、なぜ、だろうか。おそらく、体育系の男性たちはジェンダーを受け入れている。しかも、上田さんなんかだと、品の良さ、ソフトさや優しさも備えている。その上、男たちと一団になってプレーしているため、同性愛的欲望も消化している。そのことで、男性ホルモンがうまい具合にコントロールされて、好感につながっていくのだ。自分が男だということを受け入れている男は、女も受け入れることができる。女性に対しても、ある程度はわがままを言うけれど、女性のわがままも許す度量も備えている。一方で、俺は、人生の早い時期にジェンダーに囚われているため、男同士で楽しくやれない、男のエゴを女性に押し付けることもしない代わりに、女性のわがままも許せない。そういう男になってしまったのだった。

その俺がかろうじて、男としての意識を取り戻したのは、専門学校で教えていた頃だ。40代の頃は9年間、専門学校でも教えた。専門学校は、大学とは勝手が違って、手を焼くことも多かったが、俺を男にしてくれた

のは、専門学校の男子たちだった。前にも書いたが、俺は男の子たちから身体を触られて、そのことで自分の忘れていた男の部分が目覚めたのだ。本当に思わぬきっかけで、些細なことで、男としての意識が生まれるんだなあと思ったものだった。結局、俺が必要としていたものは、同性愛にも似た、男同士のスキンシップだったのだ。他の男性とふざけて、じゃれあうことで、俺の男としての意識は目覚めたのだった。普通の人なら、10代の頃に通り過ぎるプロセスを、早い時期にジェンダーで躰いた俺は、経験することもなく40を過ぎていたのである。

男としての意識を取り戻した俺は、その後、次々といろいろな男の人と親しくなっていた。俺くらい一緒に風呂にいつてくれたり、愚痴を聞いてくれたりする男性がたくさんいる男は珍しいのではないかな。普通の男は、そこまで親密にはなれないという人が多いのである。

今年の春、かつての教え子で、スポーツクラブでお世話になっていた学生が、卒業だということで、一緒に先斗町でお寿司を食べ、それから、船岡温泉に行った。息子と風呂に入った気分で楽しかった。二人で並んで、鏡に身体を映して、「やっぱり俺の方が見劣りするなあ」というと、「そりゃ、先生はお父さんくらいの年なんだから、仕方がないですよ。ぼくの人生はスポーツの人生なんだから」と言ってくれた。また、今年の誕生日は、ある同僚の男の先生が企画してくれて、かつての教え子の男の子3人と一緒にサプライズパーティをしてくれた。

楽しい男同士の交流は続く。若い頃から男同士で風呂に入ったり、男同士の付き合いみ

たいなものに焦がれていた。しかし、学歴マイノリティで人付き合いもできなかった俺は、もがいても友達はできなかった。しかし、40になって、もう友達をつくるのは無理だと諦めかけていた頃に、俺の人生は変わっていった。本当に人生は数奇だなあ。俺の女性恐怖症も治る日はくるのだろうか。それは、神様におまかせである。

4. 『ペコロスの母に会いに行く』(森崎東監督・2013)

そんなわけで、今では自分の性自認ははっきりしている。俺は男だ。しかし、それが目覚めたのは、40過ぎてからだ。あまりにも遅い。母は、「あなたは遅咲きだったんだから、普通の人よりも、20年くらい長く生きなきゃ」といつてくれる。しかし、俺が長く生きたら、悲惨だろうなあ。女性恐怖症で、女と暮らせない俺だから、きっと孤独死だろうなあ。それとも新たな展開が俺の人生に待っているのだろうか。すべて、神様におかませするしかない。一日一生。日々に感謝して、あとは運命に任せようと思う。

この原稿を書いている最中にかつての専門学校教え子から、Facebookの友達リクエストが届いた。シンクロである。俺は今、いい人間関係に恵まれている。俺って、結構、幸せなのかも。

というわけで、今回のオススメ映画は、『ペコロスの母に会いに行く』である。この年のキネマ旬報の日本映画1位である。ちなみに外国映画の1位は『愛アムール』で、どちらも老人問題を描いた映画が1位になるとは、今の時代を反映している。今年のアカデミー

賞主演女優賞も『アリスのままで』のジュリアン・ムーアが若年性アルツハイマーの大学教授役で受賞。この頃はこういうテーマのものが多。こういう映画は見ていてつらくなることもあるのだが、『ペコロス』は微笑ましく赤木春恵扮するお母さんが描かれていて、彼女の苦労だらけの若き日々を原田貴和子が好演。女の一生ものとして見て感動的である。男は痛い！ されど、女は強し！です。